チームで取り組むプロジェクト

新型コロナウイルス対策に立ち向かう獣医系技官！

**獣医系技官として
公衆衛生の知識や
行政スキルを生かして
日々対応しています。**

立案・研究調整

- コロナ対策の技術的な立案
- 健康危機管理に関する対応
- コロナ研究予算の確保
- コロナ研究（厚生労働科学研究・AMED研究）の省内調整/研究者との研究内容の調整
- 関係省庁との調整

水際対策

- 中国武漢市に在留する邦人についてのチャーター便による帰国への対応（令和2年1～2月）
- 横浜港に寄港したクルーズ船「ダイヤモンドプリンセス」への対応（令和2年2～3月）
- 空港・待機施設における帰国者対応
- 関係省庁との調整

広　報

- 記者会見/記者ブリーフィング対応
- プレスリリースの発出
- リーフレット等広報媒体での作成
- HPの更新、SNS等での情報発信
- コロナ相談窓口（コールセンター）の運営
- 関係省庁との調整

健康・生活衛生局
感染症対策部　感染症対策課　感染症情報管理室長

横田　栄一
YOKOTA　Eiichi

コロナ対応の経歴

令和３年７月～　国立感染症研究所　感染症危機管理研究センター
令和５年７月～　現職

総力戦で新型コロナウイルスに立ち向かう

国立感染症研究所では所内に新たに設置された緊急時対応センター（EOC）の立ち上げにかかわり、東京オリンピック・パラリンピック大会に関連した新型コロナウイルス感染症を含む国内外の感染症発生情報の収集・分析や関係者への結果の共有などの支援を行いました。また、令和３年11月に新たに出現したオミクロンへの対応として、エビデンスの収集やリスク評価、検疫検体のゲノム解析などを支援し、各種対策の基礎となる科学的知見の提供を行ってきました。その後、厚生労働省では新型コロナウイルス感染症対策本部広報班の副班長としてコロナ特設HPやリーフレット、SNS等での情報発信の統括や記者向けブリーフィングをはじめとした各種マスコミ対応を行い、正確かつ分かりやすい情報発信に努めてきました。新型コロナ対策は省内外の様々な職種の人が連携して対応する総力戦であり、これまでに経験の無い対応に苦慮する場面もありましたが、獣医師としての知識・経験も生かして日々の生活に直結する施策の企画立案に関与できる非常にやりがいのある仕事です。

2019年12月末、中国武漢市で原因不明の肺炎の集団感染が発生して以降、厚生労働省獣医系技官は様々な場面で新型コロナウイルス感染症への対応を行っています。

未曾有のコロナ対応を経験して～危機管理、国民への普及啓発～

令和２年１月中旬に「武漢から帰国した人が新型コロナウイルスに関連した肺炎の患者となる可能性がある」という連絡を受け、まさにその日から、令和５年５月の５類感染症への移行までの約３年３ヶ月、一担当者として業務に当たりました。

初動時はウイルスの性状など不明な中で、武漢からの邦人救護のチャーター便の対応などにあたりました。感染症対策は科学的なエビデンスに基づく対応が必要である中、海外における対応や専門家からのアドバイスをふまえ一歩一歩対応を行いました。

その後、感染が地球規模で拡大し、国内においても緊急事態制限の発令、法律の改正等前例のない状況となり、その時、その時でよりよい施策を進めることが出来るよう対応を行いました。

また、国民への普及啓発業務については感染症対策は良い施策を作っても国民に届かなければ意味が無い、どうしたら国民へ届くかということを日々考えながら対応を行いました。

感染症対応時、獣医師は知識、経験をフルに生かして対応していく必要があります。

業務が膨大かつ早急な対応が必要な時もあり、正直苦しい時もありましたが、立案・実行を行うことが出来るやりがいや達成感が得られる仕事です。

健康・生活衛生局食品監視安全課
輸出食品安全対策官
前：健康局結核感染症課　ワンヘルス班長

川越　匡洋
KAWAGOE　Tadahiro

コロナ対応の経歴

令和2年1月～　大臣官房　厚生科学課
（新型コロナウイルス感染症対策推進本部 官庁班／技術総括班（戦略班）／検疫班）
令和3年4月～　健康局　結核感染症課
（新型コロナウイルス感染症対策推進本部 広報班／戦略班）
令和5年5月～　現職

内閣官房
内閣感染症危機管理統括庁　参事官補佐

奥村　水門
OKUMURA Minato

コロナ対応の経歴

令和4年4月～　内閣官房　新型コロナウイルス等感染症対策推進室
令和5年9月～　現職

様々な観点から検討することの重要性

新型コロナ対応では、事業者の取組の支援を行っていました。

対応の長期化に伴い、感染拡大防止と社会経済活動の両立を図ることが重要なテーマになっていきました。

私たちは、事業者向けに、感染対策に関するものなど、事業継続に資する情報をわかりやすく届ける取組をしていました。

ＨＰに掲載する情報などは、現場で実施しやすく、わかりやすいものとするよう心がけていました。

チームには様々な省庁のメンバーが集まっており、感染防止や実施しやすさ、わかりやすさなど、各自が色々な観点で収集した材料をもとに議論し、発信する情報を検討していました。

厚生労働省獣医系技官は、専門性が高い反面、視野が狭くなる場合もあると感じています。

様々な観点から考えることの重要性を感じられたことが、内閣官房での業務を通じて得られた財産です。